

古川ロッパ 連用日記 翻刻（昭和二十年七月一日～九月三十日）

中 野 正 昭

要旨

昭和の喜劇人・古川ロッパ（明治三十六年～昭和三十六年）は、自身の活動を含め、昭和の芸能の動きを記した日記（昭和九年～昭和三十六年）を残したことで知られる。この日記は『古川ロッパ昭和日記』全四巻として刊行され、芸能に限らず、広く昭和の文化・風俗を現在に伝える貴重な資料として高く評価されている。古川ロッパの日記は、終戦前後（昭和二十年七月二十八日～九月三日）の日記が失われており、『古川ロッパ昭和日記』でも翻刻されていない。本稿では、この消失部分を、古川ロッパが通常の「日記」とは別に書き綴っていた「五年連用日記」から翻刻し、これまで不明とされてきた終戦前後の古川ロッパについて補完する。

キーワード

古川ロッパ、日記、昭和、終戦、芸能史

本稿では、演劇博物館が所蔵する古川ロッパ（別名・古川緑波、本名・古川郁郎、明治三十六年八月十三日～昭和三十六年一月十六日）旧蔵の「五年連用日記」（所蔵番号 H219351。以下「連用日記」と記す）のうち、終戦前後の昭和二十年七月一日から九月三十日までを翻刻する。

古川ロッパは、エノケンこと榎本健一と共に昭和を代表する喜劇人のひとりであり、昭和戦前期から戦中にかけて東宝専属の「古川緑波一座」（戦後は片仮名の「古川ロッパ一座」に改称）を率い、有楽座をはじめとする丸の内の大劇場でハイブrouな喜劇・軽演劇を上演して高い人気を誇った。

映画雑誌の記者から舞台人へ転向したロッパは、早くから文筆家としても活躍し、ユーモアあふれる随筆や批評を発表し、舞台では自ら作品を企画立案し、脚本を執筆し、演出・主演をこなすなど多彩な活躍をみせた。そして私生活においても、ロッパは「日記魔」を自称するほど大量の日記を書き残した。演劇博物館に所蔵されている昭和九年から昭和三十六年までの日記は、年度ごとの市販の当

用日記十冊（昭和九年～昭和十九年）、戦時中に市販の日記帳が手に入らず、日記帳の代わりに使用した大学ノート九十五冊（昭和二十年～昭和三十六年）におよび、その総量は四百字詰原稿用紙で三万枚以上になる。この膨大な量を誇る古川ロッパの日記は、昭和六十二（一九八七）年から平成元年（一九八九）年にかけて『古川ロッパ昭和日記』全四巻（戦前篇・戦中篇・戦後篇・晩年篇）として晶文社より刊行され、平成十九（二〇〇七）年には同社で新装版が復刊された。昭和の芸能、社会、風俗、文化を詳細に綴った古川ロッパの日記は、昭和史の貴重な資料として、これまで多くの書籍、雑誌、テレビ等で取り上げられてきた。

しかし残念ながら、この古川ロッパの日記は次の三つの時期のものが現存しない。一つ目は、昭和八年以前の日記で、これは人目に触れることを怖れたロッパが、戦前に自ら焼却処分している。二つ目は、ロッパが浅草から丸の内への進出に成功した昭和十年の日記で、これは晩年のロッパが昔を懐かしんで繰り返し読んでいるうちに紛失したとされる。三つ目は、終戦前後の昭和二十年七月二十八日から九月三日までを記した大学ノート一冊分の日記で、これは知人に貸したまま戻らなかったとされている。本稿では、連用日記の昭和二十年七月一日から九月三十日までを翻刻することで、失われた三つ目の日記の内容を補填したいと思う。

本稿で翻刻する連用日記の概要について記す。古川ロッパの日記の書き方は、まさに「日記魔」に相応しい作業で、まず日々の出来事やその時々之感想をメモや手帳に書きとめ、一日の終わり、あるいは週末や休日にわざわざ時間をとって、それらを改めて読み直

し、新たな感想や考えを付け加えて日記を書いた。先述のように、ロッパは昭和九年から昭和十九年までは各年度の当用日記を使用し、昭和二十年からは大学ノートを日記帳代わりに使用したが、昭和十七年から昭和二十一年の間は、これらの日記とは別に、一頁に五年分をまとめて書ける五年連用日記も使用しており、この連用日記は他の日記同様演劇博物館に所蔵されている。

昭和十七年から昭和二十一年までの日記と連用日記を読み比べると、この間の古川ロッパは、まず連用日記にその日の記録をつけ、別の日に改めて連用日記やメモ等をもとに日記を書くという作業を行っていたと推測される。当然ながら、連用日記の内容は、日記に比べると文字量が少なく、情報も限られている。しかし、この連用日記は現在紛失している終戦前後の古川ロッパの行動や心情を知ることができる唯一の資料であり、昭和史の貴重な資料であることには変わりない。

翻刻にあたっては、旧漢字は、人名・固有名詞を除き、新漢字に改めた。ただし送り仮名は原資料のままとした。誤字や当て字も原資料のままとし、「ママ」と記した。文中の（ ）は原資料のままであり、翻刻者の注は「」で記した。不明文字は■とした。原資料では細かく改行がされているが、翻刻にあたっては、読みやすさを考慮して一部の改行部分を変更した。

なお、昭和二十年の日記の紛失部分は七月二十八日から九月三日までだが、本稿では日記の内容の前後のつながりや、『古川ロッパ昭和日記』と比較ができるように七月一日から九月三十日までを翻刻した。

昭和二十年

七月一日（日）

大野〔福井県大野郡大野町、現・福井県大野市〕ⁱも今日一日なり、子らとたはむる。

明日出発帰京なり、山本八三、迎へに来る。

七月二日（月）

大野発午前八時五十分。

福井より金沢のりかへ、汽車旅十七時間の苦勞。
大した大混雑。
地獄なり。

七月三日（火）

汽車に揺られる十七時間。

午前六時、上野着。

上落合、わが家の焼跡ⁱⁱに立つ、雨瀟々、慘たり。

焼跡のバラックに（大庭〔六郎〕一家住む）憩ひ、本社〔東宝〕へ一時集合。

此の日より田園調布竹屋康光邸に、母上となほ〔古川家の女中〕三人にて居候。

七月四日（水）

居候生活始まる。

喜多見町の鈴木文史朗氏疎開先訪問。
此の隣家へ引越すつもりにて交渉。

植村泰二氏邸に汐見洋在り、フランク徳永もゐて、ちよいとP〔ボーカー〕。

ちよいと勝つ。

雨の中を帰る。

七月五日（木）

竹屋邸に、たゞ一日ゐたりけり。

放送局の仕事促進中、十五日頃より活発に始まる模様なり。

七月六日（金）

本社へ行き、滝村〔和男〕と話す、北海道行のこと。
イモンの仕事いろ／＼あり、座員に発表。

田中三郎の家、此の近くに在り、訪る。

七月七日（土）

柏航空隊慰問。

トラックにて送り迎へ。

帰りは、飲んで、トラック上に毛布しいて貰ひ寝て帰る。

七月八日（日）

下総中山ニツケ工場イモン。
おみやげ沢山。

七月八日（月）

弁当持つて、和田五雄家へ、〔麻〕雀しに行く。堀井〔英二〕・大庭・松井。

松井に理髪して貰った。

七月十日（火）

空襲、小型■機来。
飛行場狙ひ。

終日在宅。

七月十一日（水）

伊勢崎へ出発。

伊勢崎中島飛行場工員・家族イモン。大盛座にて二回。

新井屋旅館に泊る。
雨盛なり。

七月十二日（木）

伊勢崎中島イモン、大盛座二回。

夜半又空K〔空襲警報〕。

七月十三日（金）

伊勢崎より帰京。

みやげいろくひらく。

七月十四日（土）

終日外出せず。

読書。

北海道辺も艦砲射撃や、空襲で危い様子なり。

七月十五日（日）

療養所の時間四時。

歌と軽音楽 上山雅輔構成「皆さん元気で」放送

小花・高峰三枝子。

僕「数へ唄」（サトウ）ハチロー新作「おむすびの唄」

七月十六日（月）

今日は十時より本社にて岡庄五隊長より召集、義勇隊発会式。

北海道方面危く、連絡船壮絶の由、あちら行の話は中止とならんか。

四時、（療養所時間）物語 第一日「池田大助功名帳」朗読。
五時半、渋谷駅前空地で街頭イモンを初めてやる。

七月十七日（火）

本社へ。

森〔岩雄〕氏との話、北海道行は中止のこと、定め、八月迄は今の状態で暮し、十月頃は撮影のこと、定める。

白川道太郎、暁照子と痴話喧嘩、いろく醜態あり。本人も退座

申出づ。

夜五時より中央電信局のイモン（放送局より頼まれ）一回。

七月十八日（水）

空襲警報、朝から夕方迄つゞく。

そのため物語放送第二日「池田大助功名帳」^{〔こけい〕}は、関東地区へは出さず、地方のみとなりハリあひなし。

空Kのため、中央電信局イモン第二日目はお流れとなる。

七月十九日（木）

午前十一時半より、川崎味の素工場野天マイク慰問。その終る頃、B 29一機頭上通過、バン／＼撃ち出して珍景を呈す。引きつゞき、隣りのニツチク工場イモン。

夜は中央電信局のイモン、今日限り。ビールのみ、帰りの目蒲〔東京横浜電鉄、現・東京急行電鉄の目蒲線〕にのつたら又々空Kで、運転中止。そのため目黒より田園調布迄歩く。三時間近く。

七月二十日（金）

目黒より歩いて三時間、午前一時半帰着。

物語第三日、「池田大助功名帳」^{〔こけい〕}四時より放送。

新橋駅頭、一万人以上の人の前で街頭慰問す。

麻布のヤミ支那料理（一人前百円）を、吉田信等にオゴリ、吉田邸にて雀徹す。

七月二十一日（土）

昨夜より、牛込加賀町吉田信邸にて雀徹〔麻雀で徹夜〕。大快勝、二万六千符の成績。

わしも身体は丈夫だな。一昨日は三時間の歩き、今日は又不眠でも一向応へない。

七月二十二日（日）

熟睡、労れを取り戻す。

四時よりテスト。八時より、海外放送ボルネオスマトラ向、轟夕起子、高峰秀子、杉山美子と歌ふ。

七月二十三日（月）

朝日新聞社へ、鈴木文史朗氏訪問。喜多見村へ引越しの件、促進を頼む。

邦楽座へ出演中の竹久千恵子を訪れる。（■新劇へ貸してある）

六時テスト、八時より 歌と軽音楽 轟・波岡（惣一郎）と共に放送。

七月二十四日（火）

此のところ連日連夜、必ず一日数回のB29二機二機の来訪あり。

狂天候にて、まるで冬の寒さなり。

食物益々なし、米のないのが一ばん辛し。

無為に一日。

七月二十五日（水）

カーツと晴れてゐるのにこの寒さは何としたものであらう。狂ひ気候。例年のことと思ふと実に不思議なり。

本社へ、月給日、皆々集合す。

七月二十六日（木）

自由ヶ丘田中傳次家へ、堀井・大庭・前川と共に行き、雀戦。

徹宵。

久々の惨敗。

七月二十七日（金）

自由ヶ丘にて、昼すぎ迄十五六荘やり、大敗戦。

不眠一睡もせぬまゝ、堀井・大庭と共に横須賀の先、衣笠迄行き、そこの国民学校講堂（学校が宿舎）で慰問し、あと大いに飲む。司令と共に、ガブ。

衣笠の宿屋泊り。

七月二十八日（土）

横須賀海軍鎮守府慰問二回。

空襲のため一時の筈が二時より。

終つて、僕他三名参謀長と共に水交社にて、特別料理、昔のまゝなる西洋料理。

横病の薬剤部長より招待にて、同地魚勝で、大いに飲み、泊る。

七月二十九日（日）

横須賀魚勝より、横病へ赴き、入浴し、昼食を御馳走になり、砂糖その他の土産を貰つて、帰京。

放送局へ行くと、今夕少国民の時間の音の漫画集は、放送延期。

作曲の古関^{マコ}祐^{マコ}〔裕〕而の細君危重とかで、作曲間に合はず、と。

此の世の中に、かういふ人ばかり。

七月三十日（月）

早朝から空襲警報、解除されたと思ふと又発令、全解除は午後五

時なりき。

その中を、二時放送局へ明日の分の稽古に行きしも、殆んど人揃はず、碌に出来ず。

鈴木文史朗氏を招待、麻布のヤミ支那王サンへ行く。

七月三十一日（火）

四時テスト、八時より

音楽お伽噺 ハチロー作 仁木他喜男^{マコ}〔雄〕曲「お山の杉の子」

放送。

轟夕起子・高峰秀子・暁照子・波岡惣一郎・宮下時子。

その一寸前から警報となり、関東地区へは出ず。

八月予定日割表

戦争終結

日本敗れた

——八月十五日——

八月一日（水）



藤沢電測学校へ慰問。

野天、何千人の前にてやる。

土産^{ウツ}七年二本大喜び。

八月二日（木）

流山慰問三回、早朝流山へ向ふ、（一座二十名以上）万上味^{マツ}淋。

〔酖〕・帝国清酒にて各一回、国民校にて兵隊さんを招き一回。

いろく土産あり一同喜ぶ。

夜は、堀井と共に橋本〔啓一〕家にて徹宵雀戦。

スランブらしく、いけなかった。

八月三日（金）

流山より、横浜へ。（空襲警報あり）

横浜山手のフェリス女学校跡に屯する、横浜港湾警備隊慰問。

長官頗る感じよく、いろく馳走さる。

夜は、二次会。

磯子の■の井にて又もや飲みたり、泊る。

八月四日（土）

横浜より十一時半四谷駅集合にて陸軍省内の陸軍恤兵部慰問。
およそ、感じ悪かりし。

陸軍はひどい。

八月五日（日）

早朝出発、千葉より、八日市場へ。

沢第六六五部隊イモン二回。

開演前、空襲あり、小型機来援穴へ待避す。危かりし。

ごちさういろく。みやげいろく。

夜は、竹屋旅館泊り。

大いに部隊長共に飲むうち、又々空襲となり、メチャく。楽士
鳥海二階より墜落す重傷なり。

八月六日（月）

十一時十九分に、八日市場を出て、田園調布帰着は、夕五時なり。

何と、六時間。酒三升下げ、汗みどろで帰る。

今朝も空襲警報ありたり。このところ連日なり。

八月七日（火）

午前から昼へかけてK・K〔警戒警報〕、空Kしきりなりし。

放送局へ、十日放送北条秀司作「涼風一夕話」の打合せ。肝腎の北条氏不参。即ち果たさざりき。

四時茅場町の源来軒へ。今回の戦災地慰問隊の隊長の会。久々、皆々の顔見てたのし。立つて、演説する。

八月八日（水）

午前十時、厚生省内講堂にて、戦災援護会主催、われら慰問隊の壮行式あり。岡田〔忠彦〕厚生大臣列席。宣誓の辞、立つて一寸述べたり。

○座員二時本社集合、訓辞す。

○夕刻、上山雅輔郎にて、瀬良庄太郎壮行会。飲みて上山家泊り。

◎敵、六日に広島へ、原子爆弾を用ゐ、惨たり。

八月九日（木）

上山邸にて半日。

四時、放送局へ、エノケン〔榎本健一〕も来り、北条作「涼風一夕話」テスト、八時までかゝる。

ソ連と開戦、あゝいよく。

◎ソ連対日 宣戦布告。

◎長崎へ、又原子爆弾。

八月十日（金）

午前中空襲頻り、中々出られず、今日情報局イモンの苦なりしもそのため中止。

昼すぎ朝日新聞社へ、鈴木氏を訪ふと、戦争終結の大ニュースきく。呆然夢の如し。

座員集合したが又明日のことゝす。その大ニュースのため、夢心地にて暮す。

八月十一日（土）

昨日よりのデマ（？）のため心落ちつかず、うはづる。

二時、銀座本社にて座員集合、「結婚とは」の読み合せ。
移動連盟にても混乱して、慰問隊出発の日定らず。

戦争終結の噂、巷に拡がりつゝあり。

八月十二日（日）

竹屋家より、喜多見町鈴木文史朗氏邸へ移転す。

二時より虎屋（赤坂）へ慰問。司会をつとめ、しるこを食ひ、羊羹の土産。

四時より新富町友田（純一郎）邸にて、高井・小田進康・松田・友田にて一寸P会。ちよつびりの勝。

八月十三日（月）

喜多見町鈴木邸第二日。

第四十三回誕生日なり。

何と、早朝より空襲・終日。

外へは出られず、サン／＼なるかな。

撮影所へ森氏を訪れ、待避となり、壕内へ。
何たる誕生日。

八月十四日（火）

砧村生活は、此処から出るのが、億劫になり、此の王国内のつきあひを楽しみたくなる。

森岩雄氏邸訪問。

小泉武雄氏邸にて雀戦。

いよ／＼、戦争終結は明日発表とのこと。ラヂオでも「明日重大発表・正午」と言ふ。益々落着かず。

八月十五日（水）

戦争終結

正午、かしこくも聖上陛下おん自ら放送遊ばさる。

あ、長年にわたる戦争は終結せり。我国の敗戦。あ、。

つくぐ、つかれた。戦争中は、少し働きすぎた。今ぞ労れを感じる。

力抜け、拍子抜け、溜息の生活。

八月十六日（木）

意外なり、午前十時すぎ、プーウと鳴る。K・Kなり。戦争終結しても、まだ来るなり。呆れる。

月田一郎邸を訪れ、松山金嶺氏、徳永フランクと共に、ポーカー少々やり、久しぶりで敗ける。

八月十七日（金）

母上、鈴木夫人等同道にて、経堂下車。世田谷の新しく買った家を見に行く。汚いのでガツカリする。

吉祥寺の江川家へ、加藤成之兄ⁱⁱⁱを訪問。元氣なく力なく居られるので心配。

八月十八日（土）

大沢〔善夫〕社長の自動車にて、久々東京へ出る。
大沢氏の戦後の説、頗るよし。

二時、文ビル〔文藝春秋社ビル〕へ座員集合、訓辞す。
即ち、今後二三ヶ月は休みたい（月給は支給される、安心せよ）、その間大いに勉強、稽古して次公演に備へよ。等、その他、一般国民としての心得。

八月十九日（日）

鈴木家の朝食会。朝日新聞の川手、加藤氏来、食事雑談。新聞記者生活談面白し。

六時、大沢善夫新居（砧村）に、鈴木氏、森氏と共に招かれる。快酔、談論風発。

八月二十日（月）

十二時頃より、堀井・大庭・前川〔昂〕・松井の四人、喜多見町へ来。

雀戦開始。

徹宵。

八月二十一日（火）

昨日より徹宵雀戦、本日夕刻迄、最近のレコード、即ち三十時間十八荘也。

くた／＼になる。

今回は快勝。

一人当りけり。

夜は、フランク徳永出張し、キヤベツ料理の馳走、ウイスキーを飲み、庭で月見、ふら／＼なり。

八月二十二日（水）

九時、砧へ。大沢社長の車に便乗、本社へ。
四時半又再び、便乗帰る。

二十六日、連合国進駐軍来のニュースで騒然たり。

本社は重役会議で方針相談中なれど中々纏まるまい。

夕刻より大嵐、停電。

八月二十三日（木）

砧村に在り。

松山金嶺・フランクの三人で、一寸P。勝。

徳永フランクの料理にて夕食うまし。

八月二十四日（金）

敵進駐軍、厚木へ二十六日来るため、其地区の兵引揚げのため省線・郊外線の全部一般を乗せず、不便を極む。

社長の自動車便にて、早朝都心へ出る。友田純一郎邸へ。松山金嶺、フランク、松田、友田の四人とP、徹宵。
又々台風襲来。

八月二十五日（土）

昨夜取り引きつづき、今昼迄Pをつづけ、波瀾万丈、つひに大敗す。

交通至難の中を砧へ帰る。

連日、フランクの料理にて、避暑気分を味ふ。

八月二十六日（日）

鈴木邸にて、昼食に、フランク料理を、森岩雄氏招待にて。鈴木、森氏と快談夕刻に及ぶ。いろ／＼よろし。

八月二十七日（月）

平緒柳次来、フランクと三人でP、又々敗ける。もうポーカーに自信なき有様。

八月二十八日（火）

連合軍第一次進駐、本日厚木へ。

汐見洋とフランク三人でP、又敗。

八月二十九日（水）

一日ダレる。空には、B 29やその他いろ／＼のアメリカ機、わがもの顔の跳躍。ブーン／＼終日。

汐見洋宅にて、阿部豊、星野武雄と雀、又これも敗け。

八月三十日（木）

朝、鈴木文史朗氏と二人で、高井戸へ家さがし。気に入らず。

〔徳川〕夢声家を訪問。久々の快談。

本社へ寄する。

大沢社長の車で帰り、途中、津村家へ寄り、ジョンヘイグ飲む。

メニユ―

フランク料理
ボイル・デイナー。

八月三十一日（金）

雨で、終日砦村に在り。
家さがし、めんどくさし。

汐見洋、フランクのトリオで又一寸Pあり、少し勝。

首相宮殿下大いに活潑。ますく明るくなりそうだ。

九月の予定日割表

復員復座

菅富士男

岡田六郎

松本伸一

疎開先より復帰

歌川澄子

二十日より二十三日迄

日比谷公会堂

劇団のぼるへ貸す 星十郎

九月十八日より東宝芸能大会

第一週

市丸・舞踊隊・長谷川

九月二十五日より

第二週

一、プリューダニユーブ

東宝舞踊隊

二、歌謡漫談

川田義雄

三、鷺娘

長谷川一夫

四、歌ふロツパ

高峰秀子

川田正子

古川緑波

第一週は二円半（税共七円半）

第二週より三円（税共九円）

東宝劇場

九月一日（土）

午前中、長谷川一夫仮宅を訪問。

本社、一時座員集合せしかど、何ら発表のこともなし。

九月中旬、東宝劇場で、東宝人オンパレードの企画熟しつゝあり。

夕方より、自由ヶ丘の田中傳次宅へ。

堀井と、田中夫妻にて雀徹。

九月二日（日）

自由ヶ丘田中邸の雀徹。十四荘。勝。

九月三日（月）

終日喜多見に在り。

米兵の一部が暴行々為ありたるニュース、折角、無事進駐中なりしに、一抹の暗雲、残念なり。

夜、汐見洋、フランクにてP一戦。

竹久千恵子来宅。

九月四日（火）

昨日より空は米機の爆音盛。

立川・平塚へ米軍続々着す。

小泉武雄邸へ、阿部豊と三人麻雀する。三荘。

九月五日（水）

仕事がなく、家も定まらず、毎日実に落着かない。
早く家が定めたい。

又もやP O K E R、久々ほんの少々勝つ。

蜂須賀昭行（菅富士男）帰還す。元氣なり。

九月六日（木）

税のことを礼、相談に、粕川経理士へ赴き、礼（千円）。

母上と共に、三和ビルへ、立石欽一訪ひ、家さがしに歩く。

小田急の混雑言ふべからず、足が痛くて辛い。

九月七日（金）

終日家さがしに歩き、足劳れる。

第一師範より、田園調布へ廻り、竹屋家へ久々寄り、此の辺りに家あり。

あゝまだ家が見つからない、辛い。

九月八日（土）

一時本社に座員集合。まだハツキリした話もなし、十二日再集合とする。

我は二十二日より東宝劇場にて、第一声。座員は別に戦災地慰問に出る。

銀座に米兵多く進駐。

家探しの件にて勸業銀行へ。家定まらず落ち着かず。

九月九日（日）

松井理髪子来り、理髪。

一時よりの約束、おくれて二時すぎ自由ヶ丘田中傳次宅へ。
谷（紙屋さん）・堀井・傳次・松井にて徹宵雀戦。

煙草全く無く困つてるところ、上山を専売局へやり、売つて貰ひ大助かり。

九月十日（月）

田中宅雀徹、天候のせゐか、ちつとも発しない、ヘンな麻雀で、結局少々負け。

家さがし毎日のため、左足の甲に靴擦れが出来て痛し。

九月十一日（火）

仕事なく、家なき毎日、辛い。

米軍帝都進駐、少しも事件なしと新聞で言つてゐるが、実は中々悪辣な者あるらしく、不安なことなり。

東條英機自殺を図り、何うも死ねなかつたらしき由。

九月十二日（水）

一時本社。座員集合、要件なく、ダレる。

一時、ハチローと約束、打合せのため待つことに時間、つひに来ず。

銀座に米兵氾濫。皆、人相わるくて嫌なり。

渋谷永住町^{iv}二九の橋弘一郎宅へ。家を見乍ら（借りるので）行く。そして、堀井、大庭にて雀徹。

九月十三日（木）

渋谷永住町橋邸にて、夕刻迄、麻雀を続ける。

小雨の中を、靴ずれで痛い足を引きつづつて帰る。

橋の家を借りるのにも、いろ／＼又、条件（先住の人を追ひ出して橋がその家に住むため）あり、むづかしくて困る。

九月十四日（金）

明日夜の支那料理馳走のため、大沢社長・森岩雄氏を歴訪して招待する。

九月十五日（土）

夕方より、ヤミ支那料理屋来、大沢社長・森氏・滝村・鈴木家と母上を招待、久々の支那覇。（十人前千六百円也）

九月十六日（日）

家未だ見つからず朝は此の近くの家見。浅野末太郎家を訪れ、家探しのことを頼む。

ハチロー・上山来たり、二十五日よりと決定の東宝の歌を打合

せ。誰と組むのか、いろ／＼未定で、落ちつかない。

夜、松山金嶺とフランク来。ボカ。

九月十七日（月）

自由丘^{フツチノヒラ}田中傳次家へ行く。荒しの日、雀戦徹宵。

九月十八日（火）

自由丘^{フツチノヒラ}田中傳次家雀徹、二十何時間、十九荘打通す。そして負けた。

九月十九日（水）

撮影所にて、アメリカ記者たちと共に「三十三間堂」^v二巻見る。後、満映東宝提携作品「私の鷺」^{vi}を見る。久々の映画見物。

渋谷秀雄氏が困つてゐるなら家へ少時ゐたまへと言つて下さり、さう頼む。

家なき哀しみ。

九月二十日（木）

家さがし歩き 母上と、東横沿線。

一時座員集合。ハチロー来り、二十五日より二週間の東宝劇場、「歌のロツパ」打合せ。

夕刻、田園調布なる渋谷^{マダモ}「沢」秀雄氏邸へ。部屋を見せて貰ふ。

九月二十一日（金）

喜多見なる林敏雄家の生活も、終りに近し。鈴木家も引越し準備。二十四日より、渋谷家の厄介なり。

島津保次郎死亡。

九月二十二日（土）

十二時東京会館にて、洪沢秀雄氏よりの招待、伊藤道郎氏の話をくき会。

銀座の街路上には、ラツキー・ストライクやチエスターフィールドの空箱が沢山落ちてゐる。米兵のタバコ売り盛なり。

九月二十三日（日）

雨盛なる一日、昼寝したり、フランクとサシのボーカーしたり。

今日一時より稽古の筈なりしも、楽譜間に合はずとて中止。

明日一日の稽古にて明後日初日なり、此のやつつけ仕事を、今後は一切改めさせねばいかん。

九月二十四日（月）

日劇中三階一時より「歌のロツパ」のケイ古、ガラシなく、腹立つことのみ。

今日より田園調布三ノ五七洪沢氏邸へ、母上と共に厄介になる。

家なき悲しさ。毎日辛し。

九月二十五日（火）

東宝劇場、東宝芸能大会初日。

午後九時よりのケイ古、ガラシなく十一時近くより始まる。

大満員押すなくで、怪我人出る。レコード破りの満員。

「歌ふロツパ」といふ題名を、無断で使用せず他の題にしたことで本社へのり込み、荒れ、訂正させる。

大場岩雄よりグレーブジュース

高峰秀子より梨

九月二十六日（水）

二日目、客益々よく、三週ロングランの話出る。

「^{「ママ」}ケンタキールホーム」の歌米人に受ける。

米兵の来訪頻りなり、劳れる。

来

岸井明

赤井正友

小国英雄

柏正子

米兵五人

九月二十七日（木）

三日目、入り盛、絶対大入りなり。

歌いろ／＼たのし、熱演二回。

米プレス人数多来訪、応接に暇なく、劳れる。

川田正子よりリングゴ三個

来

二葉あき子

原田盛治

南部橋一郎

狩野氏息 キヤメル二箱

唯貞次郎

米兵十数人

九月二十八日（金）

二回共大満員。

ピエガリ氏来、その友シャール氏二人とも、とてもよし。芸人なり。

歌を習ふ約束。

夜は、堀井・石田・暁と共に、原田盛治邸へ。一泊。

来

Peguri

Searl

橋本菊二一家

九月二十九日（土）

原田邸より東北沢で母上と落合ひ、下北沢駅近くの家を見る。気に入ったが十万円也、高い。大体これと定める。

二回共大満員。

三・四週の打合せ、滝村・ハチロー。

来

中野実

壽山恵美子（チヨコレート）

田中傳次郎夫妻

九月三十日（日）

三回興行、ノビて打出し七時となる。

大満員、行列、お祭りさわぎ。

腹痛、夕刻より下痢。発熱七度三四分。だるくて、辛い。こんな時は休める身分の人が羨まし。

来

菊池寛先生

内海突破

志村道夫

西川鶴三

笛部太郎夫妻

内海健作

中野実

岩沢忠男

【注】

i 古川ロッパは六月の慰問巡業を終えると、福井に疎開していた妻子と合流し、六月二十四日に石川県加賀市の片山津温泉、二十七日からは福井県の大野町に逗留していた。

ii 古川ロッパの下落合の自宅は、昭和二十年五月二十五日の空襲で焼失した。当時、母親以外の家族は疎開中、ロッパは巡業中だった。

iii 古川ロッパこと本名・古川郁郎は、医学博士・加藤輝磨男爵の六男で、生後すぐに叔父（父の妹婿）で満鉄役員・古川武太郎の養子となった。加藤成之はロッパの実兄で、加藤家の長男。

iv 「永住町」は昭和四十一年まで渋谷区に存在した旧町名。現在の「広尾」「東」の一部。

v 映画『三十三間堂通し矢物語』（成瀬巳喜男監督、東宝製作）のことと思われる。

vi 満州映画協会と東宝の共同製作映画『私の鷺』（大佛次郎原案、島津保次郎脚色・監督）。

*主要参考文献

滝大作編『古川ロッパ昭和日記 戦前篇』晶文社、一九八七年。

滝大作編『古川ロッパ昭和日記 戦中篇』晶文社、一九八七年。

土田宏成編『日記に読む近代日本 4 昭和前期』吉川弘文館、二〇一一年。

中野正昭編『古川ロッパとレヴュー時代 モダン都市の歌・ダン

ス・笑い』展図録、早稲田大学演劇博物館、二〇〇七年。

山本一生『哀しすぎるぞ、ロッパ 古川緑波日記と消えた昭和』講談社、二〇一四年。

本研究はJSPS科研費JP22K00135の助成を受けたものです。